手段が目的になる時代

相対主義の時代

相対主義の時代には、各人バラバラに正解を導きだす必要がある。一見、自分で何でも決められ、自由にすら思えるこの状況は意外にも私たちを苦しめる。なぜなら、眼の前の世界を自分の善悪判断で色分けし基準を定めるのは、面倒くさいと同時に、「ほんとうにそれでいいのか」、つねに不安と隣り合わせだからである。

つまり、自分で何でも決定することは、思いのほか困難と不安を人に突きつける。結果、それに耐えられないと、何かを「盲目的に信じ」安心感を得ようとする。それが分かりやすい「手取りを増やす」等のフレーズを生んだり、ネット右翼を生み出したりする。

手段が目的化したニヒリズム

社会全体が権威を否定し「ものさし不在」が当たり前になるなかで、私たちの心に「ニヒリズム」がまん延している。ニヒリズムとは単なる虚無主義・頽廃的な気分を指すのではない。ニヒリズムとは、ある価値観が否定され、その虚偽を暴くこと自体が目的になる。つまり「手段が目的になる」ことにある。

どういうことか。たとえば、利益を追及していくなかで、はじめは豊かな生活のための「手段」であった金儲けが、いつの間にか金儲け自体が「目的」になってしまう。また権力や権威は本来、よい政治を行うための「手段」であるのに、権力を広げること自体が「目的」になってしまう。しゃべって何かを伝えるはずの行為が、しゃべること自体が目的と化し、おしゃべりが止められないなどなど・・・このような終わりなき拡張の論理こそニヒリズムの正体である。

そしてまさしく暴力をふるう学校の先生も、イジメを行う子どもたちも、このニヒリズムの時代を体現している。

暴力をふるうと、否定の心理、生徒の悪いところがどんどん見えてくる。それを正そうとさらに否定する。否定が否定を生み出す。

イジメであれば、最初は同級生をからかうことから始まり、やがて無視や暴力自体が快楽になっている。しかも始末が悪いのは、この否定・批判が真面目な正義感に裏打ちされていることである。自らの正義に疑問を持たない人を、啓蒙することはきわめて難しい。

何かを引きずり下ろすこと自体に快楽を感じてしまう現代社会の病がある。

「違和感の正体」先崎彰容著から一部引用
その他書籍から一部引用